

## ニホンシカとヒトとの共存を！

シカによる森林被害が深刻だ。頭数も10年前の2倍に増えたという。鼠算式に増えるわけだから、手をこまねいているわけにはいかない。天敵であったニホンオオカミが絶滅して久しいが、その代役をしていた狩猟者の減少、捕獲規制の緩和の遅れなどが遠因にある。

霧島連山の御池では、森林の乾燥化が進み、植生が変わり、ミミズがいなくなつてあの美しい野鳥、ヤイロチョウの渡来が激減している。福岡県の篠栗町では、植えた桜が食われて禿山になっているという（西日本新聞H. 29. 9. 12）。

このように多くの九州山地では、幼齡樹の新芽を食べたり、壯齡林の幹を角で傷つけたりなど、林業の妨げになっている。国は対策として、ネットやツリーシェルターなどへの補助金を、捕獲に対しては1頭最大8千円を支給しているが追いつかない。駆除か保護か、政策には紆余曲折があったが、増殖の勢いに対して今やお手上げの状態にある。



江戸時代以前には定期的にシカ狩りをした。それが適正な頭数の管理に資していたはずである。

鹿屋市に残された記録によれば、

「義弘公は部下の猛将勇率をひきいて雨をついて百引（大隅地方の狩り場）の広野の大関狩を行った。多くの狂奔する鹿の中でひととき目立つ大きな鹿が木原引兵衛の雁俣の矢に倒された。それが四人持ちの大鹿で矢は表から裏まで突き通っていた。島津義弘公はこれを見て賛辞をかけ褒美を与えた。数えると、その日仕留められたシカは366頭であった…」と述べ、百引、牛根、桜島、黒髪が狩り場に指定され、皮革生産のためにも定期的に狩りが行われていたことが記述されている。実に勇壮な狩りの絵巻が展開されたことだろう。治にいて乱を忘れず、との教えのもとに、跳ねまわる鹿は、殿方の臨戦訓練の格好の標的となったのである。

鹿児島県種子島の西之表市百年史には「奈良朝時代に鹿皮百張を年貢として納めた。馬毛島の鹿は種子島家の年貢として島の経済を支えてきた」とある。年貢のために年に百頭も捕獲したとすると、もっと多くの頭数が毎年消えていたにちがいない。種子島の隣に浮かぶ馬毛島にはマゲシカ（ニホンシカの亜種）が、多い時には一万頭もいたといわれ、大正11（1922）年に調査した北海道帝国大学の八田三郎博士は次のように書き残している。

「かかる野生の鹿群を一望の下に収める鹿苑が世界のどこにあるか、嶽の越より約 1 千町歩の大鹿苑を手取るごとく眺められ、何物の遮るものなきその特別の地形と、他に比較なき千年余の歴史を有する鹿苑とは蓋し天下一品で、日本中は勿論、世界中にもない。彼の世界随一と呼ばれる米国ヨセミテバレーの公園でもたくさんの鹿はいるが、馬毛島のその如き鹿群の偉観はみられない。この景観は実に世界一である。かかる天然の大鹿苑は我が国最古の鹿苑なれば倍々保護をくわえて之が繁殖を図り天下一品の大鹿苑を永久に残したいものだ」と。だが、現状は、という戦後の開拓団は害獣として駆除したため、今や2〜300頭が生息するのみと言われる。



←畏にかかったシカ



(シェパード。ヒグマとの共存を意図) 岩井氏提供

↑

というわけで、ヒトとシカは悲しい歴史を繰り返してきた。適正数に管理されねば双方にとって悲劇だ。ここは、逆転の発想で、ドラスティックな方法をもって対処したらいかがだろうか。まず案の概要から。

現在は、少数のハンターが山に入って畏か銃で撃つ方法が一般的だが、駆除という意味では極めて非効率的で、頭数の適正管理には絶望的だ。地域を挙げての総合的な取り組みにしなければならない。そこでシカ狩りを、原野での一大イベントとするのである。

仕掛けを述べよう。

少なくとも動員数、広さは一村規模を要する。

100人規模の勢子が、犬、爆竹などによって、ある範囲のシカをある方向に追い立てる。逃げる先には、予め準備した囲いがある。入口を徐々に狭め、最終的には袋の鼠にする。そこで登場するのが、有料で参加した勇壮な狩人たちで、彼らは、誤射のないように配慮された方法のもとに弓矢を放つ。ヒューン、ヒューン！ 矢が唸りを上げた瞬間、ズボッ！ズボッ！ 鈍い音がしてバタバタと倒れるシカ。馬上から射る手もあるだろう。見物人は囲いの外から有料で見物する。ゴルフ以上の野趣味がある。最大の難関は大勢の勢子をいかに集め、それがシカを駆り出し、追い詰めることができるか、であろう。そこは、島津義弘公時代のやり方を研究しなければならない。

次に、獲物は早急に処分され、肉はジビエ料理に活用される。レシピはあちこちで開発中だ。燻製すると酒のつまみになる。皮革は今も陶芸用などに珍重されている。

なお狩りのイベントが終わった後は、シカ牧場として、オフシーズンに徐々にと殺され

る。以上は、自然保護と天然資源活用の視点から、さらに過疎地の浮揚のためにも有効であろう。県レベルの総合的な取り組みが必要だ。法的、技術的、その他、クリアすべき問題、研究課題は多々あるだろうが、現代の鬱積した気分をこれでブレークスルーしてほしい。

なお、筆者は旧友とシカ牧場を構想していたが、相棒が高齢化して立ち消えたままだ。個人だけの熱い想いだけでは実らない。ここに広く提案するゆえんである。